「ワンストライク・ツーボール」

１９５５（昭和３０）年、静岡県磐田郡城西村、その中心の城西から離れた、山間部、その山の斜面に点在する村があった。横吹（よこぶき）立原（たっぱら）島（しま）

そこの子どもたちは横吹分校で小学校４年まで教鞭をとっていた。親の仕事は、ほとんどの家が山の仕事で暮らしていた。食生活は畑で採れた作物が主だった。

「ワンストライク・ツーボール」剛（たけし）当時二十歳が山仕事を終え横吹分校近くを歩いていると姪のあつ子の元気のいい声が聞こえた。男の子に混じって野球をしているのだった。あつ子はキャッチャーの後ろで主審だった、おかっぱ頭で丸顔で、あげた右腕の上の掌は、その握った指の親指だけをだし、誇らしく突き上げていた。

あつ子７才、昭和２３年生れ戦争を知らない子どもたちだ。１０年ひと昔とは言うけれど、その１３年前に戦争があった。剛の兄、新間徳一は剛が４歳のころ戦争に行った、そして遺骨で帰ってきた。父親勉三は怒っていた。母親は泣いていた。また夫婦には子どもが１１人いたけれど大きくなる前に亡くなった子供が多かったという。戦前戦後の食糧不足、栄養が行き届かなかったのだろうか。昭和という時代、戦争があり、それが終わって、２０歳になった剛は、どんな想いで草野球を見ていたのだろうか。「ワンストライク・ツーボール」「ワンストライク・ツーボール」「ワンストライク・ツーボール」と、あつ子は何回投げても「ワンストライク・ツーボール」と言っていたワイヤと、生前剛は笑って回想していた。そんな思い出が私には、ある。

私にはひとまわり年上の兄・姉がいる。昭和２３年生まれの姉、あつ子がいる。昭和２２年生まれの兄、政彦がいた。私は、この時代には、まだ、この世には産まれてはいない。まだ「命」というものを授かってはいない。後の父親、剛の上空で「魂」としてさまよっていたのだと思う。そんな想いで私は今パソコンの前にいる。

母親久代は、水窪の上村という所で長女として大正１５年に生れた。中学校の頃、戦争は始まった。

「鬼畜米英を殺せ」「エ～イイ！」と、やっていた、そうだ。そんな時代だったそうだ。

日本の教育は、「日本の国は神の国であり鬼畜米兵に負けるわけがない。最後は神風が吹き日本は必ず勝利するのだ」と。みんな子どもたちは教え込まれ、刷り込まれて、大人になってきたのだ。勇ましい大人たちの姿を見て育ってきたのだ。それが、つい先日までの、鬼畜米英殺せ！と言っていた大人たちが、その戦争が終わり「これからは平和の教育をします」に教育が。考え方が、変わった。アタリマエがアタリマエでなくなった時代を久代も剛も、その時代を生きた、その時を見てきたのだった。大人も子供の時があり大人の後ろ姿を見て育ってきたのだった。それが戦前の教育だった。そのときは、そんな時代だったのだった。

久代は戦争のころ親の進める人のいる横吹に嫁いだ。急峻の村でずいぶん場所が悪い所だと思ったと言っていた。旦那さんは操（みさお）さんだった。そこに政彦と、あつ子が生まれた。

戦争の混乱もかすかに治まった頃、操さんが亡くなり未亡人となった久代は子ども二人を連れ、在所である水窪の上村に帰ろうとしていた。上村の父親も母親も久代を呼んでいた、と言う。荷物をまとめ、引っ越しの準備は整っていた。

そんなとき、久代にでていかれると、新間の家は続かなくなる。残った横吹の年よりも困る。焦った曽祖父の倉蔵（くらぞう）が考え、そして言った。

「おまえにでていかれると、私たちは首くくらなければならんゾ～」

久代は上村に帰るのをやめた。が、生きていくには・・・。　そんなとき亡き操さんの弟の剛との結婚の話がでた。まさに晴天の霹靂だった。それは剛も同じだったと想像する。

１９５９（昭和３４）年、結婚、剛２４歳・久代３２歳、四月二日のできごとだった。

そのような、出逢いがあり。私は命というバトンを受け取った。生きるチャンスをもらった。

いままで、剛の上空をさまよっていた私は母親に、久代の体内で「命」を授かった。今までポワーとした何の

苦もない世界から、身体というものを会得した。心臓ができ、その心臓が鼓動し始めたのだ。ドックドックドックっと。

やがて人間らしい形になり、母親の身体から出なければならない時がやって来た。母親も大変だろうけども、私も命がけだった。参道・産道の遠くに見える明かりをめざして必死に体を回転させた。オギャーオギャーオギャー。

三七〇〇グラム元気な男の子だった。名前を勉（つとむ）、その名前は父親、剛が命名した。そうだ。

そのころの新聞家の家族は曾祖父である倉蔵・母親久代・父親剛・政彦一三才・あつ子一一歳・猫の「タマ」年齢不詳だった。祖父である勉三（べんぞう）はきよのふ（お妾さん）と切開（きいなま）新聞商店（通称エンテ）で暮らしていた。

経済的には豊かでない私の家庭は、祖父勉三には、大変な苦労したという。他人には良い顔をして、と。曽祖父である爺さん倉蔵も母も父も政彦も、あつ子も、悲しい思い出しかないと、語っていた。

当時、磐田郡佐久間町相月一五〇六番地だった「横吹」の住所だが、私が生まれる前、佐久間ダムの建設される前には城西村だった。昭和の合併で城西村は佐久間町との合併を選択したのだった。佐久間町は佐久間ダムの建設で潤い、好景気だったという。町政も潤っていたのだろう。幼稚園も他の行政区より早かったのではないかと今思う。　私は城西幼稚園に通った。私は城西幼稚園の第一期生である

まだ幼さない勉は、幼稚園かばんを下げて、一円玉をハンカチの真ん中に入れ、それをクルクルと縛った、そのハンカチを、左肩に下げ、バスの定期券を幼稚園カバンにさして横吹の家を出た。同級生のマー君・タケちゃん・サッ君・ジュンコちゃん・ミユキちゃんも、そのようにして幼稚園に通ったのではないだろうか。今では考えられないかもしれない。片道１０ｋ以上の道程をバスと徒歩で通ったのだと、母久代は私に語っていた。

横吹分校は、その年に廃校になった。そして取り壊された。だから勉は横吹分校に通うことはなかった。

勉、小学生になり横吹の先輩たちと、その取り壊された横吹分校で遊んだ思い出がある。横吹きの家（屋号シンヤ）その隣（屋号ハマイバ）のエツジ君が横吹分校の瓦礫で遊んでいるときに古いくぎを踏んだ。「勉、肩を貸せ」と言われ肩を貸した。私より五歳も、もっと年上なのか。デカイ身体は私の小さな身体では支えきれなくて、難儀したのを思えている。

タマが死んだ。

義理の兄と姉は年が離れて遊んだ記憶は微かだが、猫のタマが私の遊び相手だった。幼児期とは天真爛漫だが、えてして残酷なところもある。猫のタマを高い所から落とす、勉はそんな遊びを覚えた。どんな高い所から落としても猫は空中でクルット廻り四本足で着地する。タマは「ギャー」と言ってクルット廻って畑に着地して私に捕まらないように逃げていく。ある日、姉とコタツでタマの取り合いをしたことがある。私がシッポ。姉が胴体を持って引っ張った。タマの取り合いだった。タマのシッポが二センチぐらいのところから切れて私の手に残った。「ギャー」と言ってタマは姿を消した。

それでもタマは寒い冬の夜、わたしの布団にもぐり込んできた。ゴロゴロと喉を鳴らして頭で私の布団をめくっていた。

学校から帰ってくると何時もタマがいた。そんなタマがある日から、いなくなった。姿を見せなくなったのだ。数日たって父親が、デーの横の神前場の裏で死んでいるタマを見つけてきた。父親と、そのタマを家の下の屋敷の、その下の桑の木の根元に穴を掘って、埋めた。小学校低学年のとき、学校の帰りは何時も、そこによって手を合わせてから帰宅した。父親と母と三人での夕食のとき、私が言ったそうだ。

「タマは、ご飯食べているかナ～」

父親が

「天国で食べているワイヤ」そう言ったら、私がシクシク泣いたそうだ。

三人家族、暗い気持ちでの夕ご飯になったそうだ。

プロレス中継

毎週金曜日の夜八時プロレス中継はあった。が、何かの理由でプロレス中継が無かったときに「野生の王国」そんな番組をやっていたと記憶する。シカの親子が散歩している。餌を探している。その親シカが怪我かなんかで動けなくなり、その親シカと子どものシカを望遠レンズの撮影機器だろうか、遠くからとらえている。子どものシカは、その親のシカの口をなめ、それでも動けない親のシカを諦め、その親シカを置いて走って原野のかなたに消えていく。ナレーターが一言、心を抉る解説を説く。感動して涙が出てくる。そんな子供だった。

隣のマー兄が死んだ。年老いた母親を残し、奥さんも子どももいた。横吹の葬式は土葬だった。葬式の前に組合集が墓地に行き穴を掘ってくる。多くの人が集まり葬儀が始まり、その亡骸を担ぎ横吹のお墓まで列を作り歩いていた。和尚を先頭に親族が行く。子ども心に、その列に物悲しさを感じた。その棺桶を担いだ列、その人たちが歩いた道の途中に、藁のムシロをしく習わしが、横吹にはあった。村の人たちは、その藁のムシロが腐って無くなるまでマー兄のことを忘れない。

政彦が中学3年あつ子が中学1年のとき城西中学校は佐久間中学校に統合した。多くの学生が城西方面から飯田線に乗って佐久間中学校に通う。文房具屋は大学堂を利用した。

横吹での子どもの頃、の遊びは壮大だった。私の家の屋号をシンヤという。そこの巨木にタッチして街道を南に走り（役１㎞）フネゴの門をたたいて帰ってくる、それを二周。「今日はマラソン大会だ」ガキ大将ハマイバのエツジ君が命令口調で言う。ガキどもは、そんなガキ大将の考えた遊びをやる。

こんな時もあった。缶空蹴り（かんからけり）だ。横吹の街道より少し上のお寺、屋号ワゼ（守屋さん）の家の上に、そのお寺がある。そこの狭い庭での、缶空蹴りだった。

その前に、横吹は山の中腹にある村だ「斜面集落」だ。そこは世の中が車の世界になり、街からの生活必需品を車で買って国道１５２号線の「オウダイ」からサクドウ(ゴンドラのようなもの)で、その横吹に運び上げるのだ。ガスとか米とか。また、その横吹は縦に長い村だった。私が暮らしている所より、もっと、も～と上に、キリクボ、そんなところが、横吹にはある。そこに物資を運ぶには、そのサクドウが二段になっていて、「オウダイ」からお寺の横の終点まで持ちあげて、それからお寺の横のサクドウでキリクボまで行くのだ。

話しを元に戻して、缶空蹴り。缶空蹴りのルールは知っているだろうか。鬼が缶の空を陣地にして周りに隠れた人を探すゲームだ。誰かが缶空を蹴った。私は急いで、そのサクドウの下に隠れた。小さな身体だから隠れるところは意外とたくさんある。そこに、前横吹分校の瓦礫で遊んで釘を踏み肩を貸した、エツジ君がサクドウの上に乗ってきた。自分の上にあるサクドウがギシッと揺れた。鬼は私たちを探しに来る。そのうちに、そのサクドウが動き始めた。今までサクドウの陰に隠れていた私は丸見えになった。

それよりなにより。サクドウはエツジ君を乗せてキリクボに向けて遠く高くユックリと動いていく。私は走った。

「エツジ君が乗っている～。とめれ～」と。

エツジ君はサクドウを降りようとしたのか、サクドウに両手で捕まってぶる下がっている。そのサクドウは一番高い所で停止した。エツジ君は力尽きたのか、サクドウから手を放して落下した。まるでスローモーションのように落下した。

あ、あ～あ～あ～。。。。ドサ。エツジ君が落ちた～～～。

ワゼの茶工場の前の草むらに落ちたエツジ君はピクリとも動かなかった。そのうち大人たちが集まりだした。エツジ君は戸板をタンカー代わりにしたやつで水窪の病院に運ばれた。横吹の大人たちの手で運ばれた、大人た

ちの連係プレーには感心した。缶蹴りは誰が言うでもなく終わりになった。エツジ君どうしちゃったのだろうか？

エツジ君は何食わぬ顔で次の週も遊びを考えてきた。夕方の肝試し。お寺から提灯を持って。山の向こうの御宮（熊野神社）に行く。そこで、そのお宮の戸を叩く。そこで暗号を言う「オダイサのバカ野郎～」エツジ君の命令では「デカイ声で言え」だった。コッチに聞こえるようにと、と子どもたちに命令した。それを聞いた同級生のサッ君は弟とそそくさと帰った。暗い森の中の熊野神社が怖かったのだろうか。私は挑戦した。

薄暗い山道を一人で駆けだした。後ろから誰かがおってくるような気がした。恐怖を感じたが走った。

「オダイサのバカヤロ～」

怖かったけど、ヤッタ。やり切った。

恐怖に打ち勝ってお寺に帰ってきてきた。私は、エツジ君に聞いてみた。サクドウから落ちた話を聞いてみた。

「親父がうるさいで、死んだふりをした」と言っていた。

こんな時もあった。

横吹から子どもたちだけで、山に登った。キリクボに行き、そこから、もっと奥へと上って行った。キリクボの人の田んぼがあった。そこに火縄銃があった。もっと進むと鉄塔があり裏山を降りると民家があった。南野田だそうだ、同じような子どもと時間を忘れて遊んでいたとき五時のボーが鳴った。

「早くかいらんと、トーチャーに怒られるゾ～」横吹の子どもたちは急いで山に登った。私は一番チビ、付いていくのが大変だった。今も、そんな夢を見ることがある。待ってくれ～。助けてくれ～（汗）

小学校の帰り。私たち同級生はマー君・タケちゃん・その他の人で飯田線の相月駅に降り、国道を歩き横吹に上る坂道を歩いているとき、ある人がマー君の背中にオバコの葉を付けた。そして言った「背中に毛虫がおるゾー」マー君は上着を脱いだ。他の人がまたオバコを着けた、「背中に毛虫がおるゾー」そして誰かが言った。マー君は、また脱いだ。ついには裸になった。

「や～イイ」たわいもない遊びだった。

それを聞いたエツジ君が私たちを、マー君にオバコの葉を付けた者を呼び出した。場所はハマイバ（エツジ君の家の屋号）の下の井戸。呼び出された者は、満タンに水が溜まっている井戸の横に集められた。エツジ君は「悪さをした者を罰として息止めの刑にする」と言った。

私たち一人ひとりを、頭をわし掴にして、井戸の水に顔面を浸けた。

「わかったか、もう、そんなことやるな」と言った。

子どもたち、たわいもない争いケンカもある。バカ野郎、と言ったこともある。そんな時のエツジ君の仲直りのさせ方は、こうである。

「何時までもグズグズ言うな！」と言ってから。まず二人を握手させる。そして、その二人の手を握らせて、「GO—」と言え。というのだった。「GO—」と。

バカ野郎と思う心が溶けて流れていった。「人を憎んでも恨んでも、何も残らない。笑って暮らした方がイイぞ～」とエツジ君は言おうとしたのかもしれない。

横吹は、横吹の最寄りの駅は飯田線の相月駅、今も昔も無人駅だ。北に城西駅・向市場駅とある。横吹の子どもたちは、水窪で遊んで向市場駅で、電車に乗って返ってくる。エツジ君は、そこ向市場駅でウンコをひりたくなった。駅の公休便所で用を足し。手を洗ってエツジ君が言った。

「柿食えば、黄色モノが、向市場」なんのこっちゃ(笑)

私たち横吹のガキどもは、ガキ大将エツジ君の号令のもと団結していたような気がする。城西とか水窪とかと違い、貧乏な村で、お祭りで屋台もないけど、それはそれで楽しい思い出が多くある。

横吹での夏休みは、近くの沢、大沢（オオサ～）に保護者と子どもが集まり、水泳場をつくる事から始まった。小さな、小さな、その沢に石を集めて、沢の水をせき止め、横吹の子どもたちの水泳場づくりから始まった。今思えば、凄く小さなため池のようなところだけど、子供のころは、それが大きな大きな水泳場に見えた。沢の水は冷たく、夏でも寒くなって唇が紫になった。冷えた身体を温めるため、太陽の光で温まった岩にしがみついた。

小学校５年生のころ城西小学校にプールができた。横吹の大沢の、夏恒例の水泳場づくりもやらなくなった。

親父剛は城西のマルシ（製材所）に通った。最初オートバイだったけど、やがて車の免許を取得した。道路は国道１５２号線を島から上った横吹の村の中腹にある、大黙さん家の上まで来ていた。

親父の車は、その道の途中に横吹の道と立原（たっぱら）の三叉路辺り車庫を作り、そこに置いて家まで山道を歩くようにした。

不便な横吹の暮らし、家の前まで車の道がほしい。

大黙りさんの上まできている村道を延長する話がでている。父親は、その横吹に村道をつくる話し合いで夜遅く帰ってくることが多くなった。酒の飲めない父親は酒がでる集まりは避けていたが、これからは車の社会になる家まで車が入れば便利になる、と。言っていた。しかし、その話は中々まとまらなかったようだ。私の畑は絶対通さないと意地を張る人がいたと聞く。横吹は縦に長い村だ。難しい問題だ。

横吹は縦に長い村だ。下の街道が大八車の道、横吹の真ん中にある街道はチョンマゲの人が通った道である。横吹は、このチョンマゲの人が歩いた街道から上側が「上組」下側が「下組」となっていた。下の国道から歩いて横吹の斜面集落を上ると向かいの山の稜線に、山の峰から峰へと続く線に、竜頭山（１３５２ｍ）が顔を表してくる。私の家からは、その竜頭山がチョコンと見える。その竜頭山は横吹の高い所に行くほど綺麗に見える。高い所に暮らしている家から望む竜頭山はその山容を大きく表して、より美しく見えるのだ。

城西小学校を卒業し佐久間中学校へ、クラスはB組だった。城西もにぎやかな町だけど、佐久間も、それ以上に、にぎやかだった。佐久間の人たちは、ませた男女が多かったような気がする。クラスはA組B組C組、全クラスで１２０人くらいだろうか。佐久間には電源の人たちが暮らす住宅があり、ゴルフをやる人がいた。ゴルフボールというものを私は初めて見た。ゴルフボール中はゴム糸がグルグル巻いていた。

同じクラスのユキ、わしより背が高くて堀の深い顔をしている。そんな奴がいた。そのユキが男子トイレで私の隣になり私のアレを覗いた。

「ケーハイタカ～？〇〇こすると気持ちよいゾ～」と言った。

城西小学校では聞いたこともない言葉だった。バカな奴だと思ったが、俺より数倍頭が良い奴だった。

中学校一年の、ある日の朝礼で、校長先生が

「本日沖縄が日本に返還されました。」と言った。佐久間中学に沖縄出身の子がいると言った。「手を挙げてください」と。

廻を見渡したら前列に手を挙げている人がいた。

佐久間には英語の塾があるという。中学から始まった英語の授業、佐久間の子は初めてなのに片言の英語が話せる奴もいる。城西小学校からの子は後れをとった。

先生も厳しい人が多かった。突然居残りがあったりする。懐中電灯を持ってこなかったことを悔む。帰り真っ暗闇を手探りで帰ったこともある。

富士鐵工所

「わ～しずのええきを東向き～。どんどん歩くと見えてくる～。

ゆこーぉ～。ゆこーぉ～。富士鐵工へ～～

富士鐵工イイとこ良いところ～なんとかオマンマ食えるとこ～♪」

この唄から私の青春が始まったような気がする。

「はい。この『ゆこーぉ～。ゆこーぉ～。』のところは、左手を腰に、右掌をグーにして、その手を高く突き上げてください」

怖いような、怖くないような。面白いような、つまらないような。寮長の説明だった。

同期のヤマグチが、「なんとかオマンマ食えるとこ～♪」の、ところを声張り上げて「なんとかオマンコ食えるとこ～♪」と歌った。

みんなが笑った。新入の寮生も、寮の先輩も。

そんな元気の良い人は誰かと聞いて、そのヤマグチの所に近づき。

「お前には、まだ早い」

と、寮長が、言った。

寮生は富士鐵工所の人たちは、様々な所からきている人がいた。森町・引佐・三ケ日・佐久間・水窪、その他東北の人、九州の人、北海道の人など。など。

寮の部屋長は熊本からココ静岡県湖西市鷲津に働きに来ている人だった。

横吹からご飯のオカズにと南蛮味噌を持って来たら。

熊本の人は、味噌は食べないのか？その時初めて知った。

「味噌なんか食べるのかぁ～？味噌は味噌汁だけに使うものだと思っていた」と言われた。

その部屋長は、面白くて少しエッチな人だった。トランプをやろうと私たち初心な新人を誘い、カードを切った。薄笑いしながら、私たちに、そのトランプを配ったら、なんと。そのトランプの絵を見たら・・・・、な・な、なんと春画だった。初めて見る春画。おぉぉぉ。熊本の、その先輩は、それを美しい～っと言っていた。その後、生の写真も出てきた。

当時の富士鐵工所は日産自動車の下請けとしてトランスミッションをユニットとして組み立てていた。私は、その部品の一部の加工の仕事だった。

月末になると、作業員がソワソワするときがある。そう給料日だ。現金支給、五時になりみんな組長の元へ集まり、一人ひとりに手渡しで給料を渡すのだ。

「ご苦労様」「ありがとうございます」

一通り渡すと組長の訓示が始まる。私は人影で隠れた所で給料袋を開けて中を覗いた。有り難い聖徳太子様が数枚あった。親の言いつけで天引き貯金は一万を続けるようにした。

少ない給料、月末には手持ちのお金が底をついた。寮のご飯を食べると、寝るまで何も食べるモノがない。腹が減った。コッソリ残ったご飯を食堂に食べに行った。

先輩に譲ってもらったオートバイ、ＤＴ２５０、行動範囲が広くなり、そのバイクで白須賀の浜まで行った。太平洋は見たことはあるが、一人でオートバイに乗って、白須賀の浜の堤防に腰掛けて見た夕日には感極まって心の奥が暑くなった。太平洋は広いナ～～～。

土曜日の昼、一人で新居の国道一号線を、そのバイクで流していたら、見覚えのあるサングラスをかけた変な人がいた。佐久間中学校時代の同級生コウリュウだ～。。。学校をヤメ、今新居の町工場で働いている、そうだ。

み〜ヤンもカズに〜もいるという。その新居の町工場の横のそんな人たちの集まっている所に行った。日本テレビ系で日曜の夜八時からやっていた中村雅俊の俺たちの旅、そんなテレビドラマのような生活だった。いや、それとはカラーが違っていた、かな。

ある日、み〜ヤンから夕方、富士鐵工所の寮に電話があった。

「鷲津のボンで女と酒飲んでるから、おまえも来い」と。まだ１８にもなっていないのに飲み屋の女の子を連れまわし、み〜ヤンは、ませていた。当時カラオケなどはなくジュークボックスにコインを入れてレコードを聴いて、それに合わせて歌っていた、そんな記憶が残っている。移動はタクシーだった。私は寮まで送ってもらった。隣に座った飲み屋の女の香りに酔った。ミ―ヤンは大人だな〜。と感じた。

仕事が終わり寮の食堂で味噌汁をすくっているとき、二学年先輩のクリノが私の横に来て、小声で言った。

「暴走族をつくる。部屋に集まれ」なんのこっちゃ(笑)

部屋に行ったら、会費だと５０００円盗られた。あとから5枚ステッカーをくれた。初めての走りは大雨の日に三ケ日の廃校になった小学校まで車で走った。そして、そこに泊まって帰ってきた。暴走族とは名ばかりで「信号はちゃんと止まれよ」とクリノが言った。

その内に職場が熱処理になり、勤務体制が変わった。四日働いて二日休みで夜勤・昼勤を繰り返すような勤務になり。日曜の休みが少なくなり、み〜ヤンとかコウリュウ・クリノとの付き合いはできなくなった。これが私には、ラッキーだったのかもしれない(笑)

夏、お盆に横吹に帰った。一学年年上の隣のアキチャンと、庭の縁台でビールを飲んだ。下の方に横吹に上る道路に音楽がなる。

「カワイイ♪カワイイ♪魚屋さん♪」焼津からの魚売りだという。カ―チャーが、「南」(屋号)まで行って刺身を買ってきてくれた。目の前の山に小相月の村が見える。その山の稜線にチョコット竜頭山が顔を出している。その真ん中の凹んだところに反射板があった。

まだビールの味などわからない年齢だったけど、今また、あの縁台でビールを飲みたい。ビールの味より横吹で新鮮な刺身を食べることができたことに感激した。

そんなとき

アキチャンが私に言った。

「ハング・グライダーやらんかぁ〜。」

トンビが二匹、空高く円を描き旋回している。そんな風景を見て

「気持ちよさそうだゾぉ〜」と言った。

が、自分には無理だと思った。危険だし。勇気がないし。運動神経ないし。頭は悪いし（関係ないか）

その次の週、そのアキチャンに誘われて愛知県一宮市のハング・グライダーショップ「ロコ」に行った。店番の女の人に伊吹山でスクールをやっているので見学してきたら?と言われ伊吹山に行った。色とりどりのハング・グライダーがスキー場である山の斜面に並んでいた。講習生が「行きます」と言って飛び立っていった。空を飛んでいる。講師の人に聞いたら「ここを卒業したら、大空ダガヤ」と遠くの空を指差した。その指の先には伊吹山の空高くに、赤や黄色や青のハング・グライダーが気持ちよさそうに飛んでいた。

講習の帰り、アキチャンはその講習の入会書にサインし入会した。私はしなかった。

鷲津に帰り。熱処理の仕事、休みの日にはパチンコが主だった。本興寺の前の１００万ドル、パチンコ玉を両手で握り台を探し、勝負をかける。釘の傾きを見て、この台だと決めタマを受け皿に流す。暇だからパチンコが最適な趣味だった。スッテンテンになり。その１００万ドルから車で帰るとき浜松信用金庫のＡＴＭがあった。もう少しやろう。そう思ってカードを差し込むと、残高がありません。と。虚しさの風が胸の中にヒュルル〜っ

と吹いていった。(泣)

ハング・グライダー

次の給料日の次の休みの日、高速道路を名古屋方面に向けて車で走っていた。危険だし。勇気がないし。運動神経ないし。頭は悪いし、自分には無理だと思った。それでも自分の中の少しの挑戦という魂の熱が出てきたような気がする、ハング・グライダーをやってみたい。

ハング・グライダーショップ「ココ」で入会し、その日から伊吹山に行き講習を始めた。ハング・グライダーの講習には、A証B証C証と段階が上がり最後パイロットを取得して大空に飛び出すのだそうだ。そのパイロット講習には座学に航空力学・気象学などもある。年末だったので、講習は数日で終わり次の講習は春からだった。

春になり講習を始め、パイロットを取得したのは夏の終り頃だった。私は岐阜県の伊吹山・池田山、愛知県三河の五井山・蔵王山・衣笠山などをハング・グライダーの仲間と飛んだ。その中の先輩で、大変お世話になった寿司屋のケンさんがいる。

ハング・グライダーとは、要するに一人乗りのグライダーだ、グライダーと違うのは、グライダーはコックピット(操縦席)の中で操縦桿を握っているが、ハング・グライダーは、そのようなコックピットはない。身体全体で風を受けて大空を飛ぶのだ。機体の真ん中にコントロールバー(三角のところ)があり、その頂点にカラビナを付け、それにハーネスを身につけた自分の身体を吊るすのだ。そして、そのコントロールバーでハング・グライダーを操作する。コントロールバーを左に押せば右旋回し、左に押せば右旋回する。また、手前に引き込めばスピードが出るし。前に押せば空気の抵抗でハング・グライダーは止まる。

大空にトンビが舞っているのを想像してほしい。トンビが羽ばたかずに大空に舞っているのを。太平洋側にある山の斜面では、太平洋側から来る南風を受けトンビは、その山に沿った上昇気流を利用して浮いている。山のトンビはサーマル(上昇気流)を利用して旋回している。そのサーマルが強いほど高く舞い上がる、のだ。

サーマルとは、温まって周囲より軽くなった空気が上昇するもの。それをトンビは探し、そのサーマルの中をグルグル旋回し高く高く舞い上がるのだ。ハング・グライダーも、そのトンビと同じ飛び方をする。

サーマルとは、温まって周囲より軽くなった空気が上昇するもの。よくわからないかもしれない。鍋に水を入れその鍋をコンロで熱したところを、想像してほしい。鍋の水が温まると鍋の底から泡がでる。それがサーマルだ。ハング・グライダーはそのサーマルを利用する。空から見下ろした大地、そこにサーマルが涌いてきそうなところ探し飛んでいるのだ。しかし、そのサーマルは人間の目には見えない。太陽に照らされて、他の地形と違いサーマルがでそうなところを探せ。と言われるのだが、難しい。やはり経験と勘が必要だ。それをベテランの人は・そのサーマルを見つけるのが早い。私たち初心者は、そのベテランの人の見つけたサーマルを借りる。そのベテランの人の下で旋回するのだ。

私は、一回だけ、コンディションがよくサーマルがイッパイ涌いている夢のようなところを飛んだことがある。岐阜県の池田山での滑空だ。ハング・グライダーもトンビも飛んでいた。楽しかった思い出だ。蒲郡の五井山でも何度か飛んだが、こんな長時間飛んだのは初めてだった。

ハング・グライダーショップにサーマルが見える偏光グラスが売っていた。値段もマーマーする。偏光グラスと言えば魚釣りを趣味とする人が掛けている、光の無駄な反射をカットして水の中で泳ぐ魚が見えるそうだ。科学の力で、多くのものが開発されていく。便利なものが多く世の中に出ていく。

しかし、サーマルが見えれば高く遠くに飛べるのか。私は買わない、サーマルが見えるより、ハング・グライダーの先輩の後を追って、飛んでいる方が楽しかった。より長く高く飛ぶより、そこで出会った仲間との語らいに楽しさを感じていた。

湖西市鷲津から蒲郡市にある五井山に通った。ナカネちゃん、ヒロ君、ナカガワ君などが寿司屋のケンさんの下に集まった。ケンさんは北海道からココ蒲郡に来た人で、幼少のころから空に憧れていたという。読売テレビの鳥人間コンテストにも参加したそうで、その映像のビデオテープがあるそうだ。

寿司屋のケンさんが、仕事の休みの日、静岡の朝霧高原に飛びに行こうと話がまとまった。ケンさんが寿司屋の仕事を終わった夜の出発予定だった。私はケンさんのアパートでケンさんの仕事を終わるのを待っていた。そのケンさんが晩飯だと言って寿司のネタのあまりもの、と言って大盛りの海鮮丼を持って来てくれた。まだ時間があるからビデオでも見てな。と昔ケンさんが参加した鳥人間コンテストのビデオのテープを差し出した。それは鳥人間コンテストのコミックの部門で、ケンさんはゼロ戦に乗って「ただいまから出撃します」と滋賀県の琵琶湖の湖上に設置されたテイクオフ場から琵琶湖に向かってテイクオフしていた。

五井山でみんな集まって飛ぶ約束をした、その日、私は一足先にテイクオフ場に行き、一人で早い昼飯にとアンパンを食べていた。そこにナカネちゃんがハング・グライダーを見たいという女の子を連れて来た。私を見た、その人は、それから私のことを「アンパン」と言うようになった。

ハング・グライダーで一番緊張するときは、着地するときだ。広い田んぼの真ん中に着地するのは簡単だ。上空から着地地点の吹き流しを見て、風の向きを確かめ、吹き流しのシッポから風下から、フォローからハング・グライダーを侵入させる。

そのときグライダーの高度と滑空比を計算して高度を落としていく。着地地点近くでコントロールバーを押し出せば、グライダーはフワッと着地する。

それが伊吹山は二合目スキー場に着地する。五井山は段々畑を借りていて。どちらも着地するときが難しい。私は五井山で着地するとき失敗して足のかかとを怪我したことがある。最悪だった。いろいろあったナ～、ハング・グライダー。

富士鐵工所で、私の職場が熱処理で、その前の職場はトランスミッションのケースの加工だった。そのトランスミッションケースは鋳物でできている。その鋳物の加工は粉塵が多く出る。その鋳物のトランスミッションのケースは、富士鐵工所の敷地内にある鋳物工場でつくっていた。

熱い鉄を溶かしたものを鋳型に入れ製品を作る。加工の仕事より、もっともっと大変そうな作業だった。粉塵もハンパないだろう。その工場は炉の熱を利用しての、お風呂があるそうだ。作業で真っ黒になった作業員は仕事が終わるとお風呂に入って帰宅するという。

富士鐵工所、私の現場に、カツミは来た。石川県の能登の人だという。二年の訓練校を卒業しての入社だった。能登のなまりが、なんか優しさを感じた。その人とは一年と少し一緒に働いていた、そのとき、能登に帰ると、カツミは私に言った。親と一緒に暮らすと言い出した。それは、そのカツミの兄妹で話し合って決めたという。高齢になった親の面倒を誰が見る。そんな話し合いだったそうだ。

兄も姉も家庭を持っていて、自分の意見だけでは、どうにもならないという。そこでカツミは俺が帰ると、言ったそうだ。独身だし身軽だし、俺が帰れば全ては上手くいく、と。

富士鐵工所はコンピューターを使ってトランスミッションのケースの加工を始めているころだった。そのコンピューターの記憶媒体は、まだパンチカードの時代だった。カツミは、そんな仕事を任されていて、上司にも期待されている存在だった。

だが、そのカツミは、愛車バイオレットに引っ越し荷物を積み込んで、故郷の石川県の能登半島に帰って行った。

そんな出来事から数年たって、職場も熱処理になって
私に、佐久間町の横吹に住んでいる父親から電話があった。
「横吹には道路はできない。協力的でない人が多い」「横吹を出たい佐久間を出たい」と。
だったら湖西に来いよ、浜名湖はあるし老後も楽しいゾ～。と言った。
数日たって、父親から、また電話がかかってきた。

「やはり佐久間町を出たくはない。先祖が遺したものもあるし・・・。」

親父の心も揺れていたのだろう。私の心も揺れていた。私は佐久間に帰る決心をした。

佐久間に帰ることで、ハング・グライダーをやめることにした。

ハング・グライダーの仲間は、それぞれ新しい機体に乗りかえる人が多かったころ。私も愛機アトラスの滑空比に物足りなさを感じていた。機体を変えようかと迷っていたが・・・。ハング・グライダーをやめることにした。

私２７歳の冬、衣笠山を一人で飛んだ。上昇気流は捉えられなかったけど、１５分くらいだったけど、着地はフワッと綺麗に決まった。その愛機アトラスは横吹まで担ぎ上げ、その横吹の家に保管した。

１９８８（昭和６３）年の春、私たちは横吹に帰ってきた。横吹に暮らし仕事は水窪事業所になった。

ちょうど政府では、ふるさと創生事業と各市町村に一億円を交付したときだった。

私はというと、故郷に帰っては来たが、その後すぐ本社への出向の命令が来たのだった。本社で働き金曜日の夜、車を飛ばして帰ってきて。国道152号線を島から上って立原に行く道と横吹に上る道との三叉路辺りの道端に車を止めて山を上った。２０分ぐらいだろうか、家に辿り着いた。この道を父親は隣のターニーはその隣のマーニーは上ったのだ、毎日毎日。その他の横吹の人たちも登ったのだ、毎日・毎日。斜面集落「横吹」に、先祖が、そこに家を構え、横吹の人たちは先祖が待つ、家の人が待つ横吹に、毎日・毎日、家を目指し登ってきたのだ。

「横吹には道は出来ない」車が入らない家には暮せない。私たち家族は佐久間町でも比較的便利な半場に行くことに決めた。その家は水窪の坂本建築に頼み半場で棟上げ建舞をやった。餅まき「散餅銭の儀」がすみ振る舞い酒、羽ケ庄の叔母さんが、お祝いにと矢岳で採ってきたマツタケを持ってきた。立派なマツタケだった。カーチャーもネーチャーも「うん～立派だ♥」と言っていた。

次の年、その1月8日、昭和天皇が崩御し新しい年号「平成」が始まった。私たち家族は、平成元年3月に、佐久間町でも比較的便利な半場に越してきた。

仕事は、富士鐵工所水窪事業所、そこは１００人くらいの人が働いていて、若い人もいた。佐久間には佐久間駅伝があり、水窪には北遠駅伝があったので、その若い人たちに駅伝に誘われた。

半場に越して来たのは平成元年三月、走り始めたのは、そんな年、平成元年の六月だった、佐久間部品一周約一キロ、それがとても苦しかった。

伊吹山でハング・グライダーをやっているころ、親子でハング・グライダーをやっている人がいた、その親は６０歳になったという。四日市工業高校の先生だという。その人は、還暦の記念に息子に買ってもらったと赤いアトラスを担いでいた。白髪の人だった。

佐久間に帰って走り始めた私は、いつか自分も６０歳になって健康なら、ハング・グライダーを、またやる日が来るかもしれない。と思った。

佐久間駅伝の当時の開会式は、浦川中学校だった。参加者は多く浦川中学校のグラウンドはランナーでいっぱいだった。北遠駅伝は静岡県で二番目に伝統ある駅伝である。町民の応援も激しく箱根駅伝を彷彿させる熱狂ぶりであった。箱根駅伝を観に行ったことないけど(笑)

駅伝のメンバーの中にユキニ～。がいた。５５歳くらいだろうか。大股でノッシのっし、と走る人だった。昔大怪我をして、それから走るようになったと言っていた。北遠の冬、駅伝のシーズンが終わり、私は、そのユキニ～に誘われ秋葉ダム桜マラソン（１０㎞）に参加した。初めての１０キロ、私は5キロ以上走ったことがない。折り返し地点から未知の世界だ。ユキニ～は折り返し地点を過ぎたところで確認すると私のすぐ後ろだった。もしかして抜かれるかも。３０歳、不甲斐無い自分がいた。

次の年も秋葉ダム桜マラソンに参加した。今度は去年より速く走りたい、と考えていた。自分に負けるな。ス

タートして直ぐに、後ろから、私の名前を叫ぶ人がいた。佐久間中学校の同級生ユキだ。

「おれたちも３０歳、健康のことを気を付けにゃ～」と言っていた。

１９９１（平成３）年磐田大藤マラソン、初めてフルマラソンに挑戦した。ハーフまでは調子が良かったが、それからが、地獄の苦しみだった。

ゴールまで残り１０キロ、もう走れない、私は歩いていた。そんなとき後ろから来た人に声をかけられた。浜松市のスズキさんという人だ。６０歳になり今年度で職場を定年退職だ。それを記念して、この磐田大藤マラソンに申し込んだという。私は、その人と一緒に歩いた。最後５００ｍの看板が見えたとき、「最後は走ろう」と、そのスズキさんが言ったので走り出し、最後そのスズキさんと手を繋いでゴールテープを切った。タイムは4時間５１分０４秒だった。

１９９４（平成６）年、小笠・掛川マラソン、私の五回目になるフルマラソンを完走して、佐久間の家に帰ってきて、テレビを付けて、昼ごはんの用意をして、自分の5回目のフルマラソン完走を記念して一人祝杯、自分へのご褒美にと缶ビールをプシュっと開けた。そのビールを飲んでいるとき。家の電話が鳴った。昔のハング・グライダーの仲間、ヒロ君からだった。

「なんだチャイや、珍しいカイヤ。」そんな言葉を言ったと思う。ところがヒロ君は言った。

「・・・ケンさん死んだ」と。

場所は、岐阜県中津川市の根の上高原だという。

そこは、大きな深い山で、テイクオフ場から遠くに中津川の街並みがみえていた。三河の仲間、ケンさんたちと、その中津川の根の上高原で飛んだとき、ハング・グライダーで遊んだとき、家に帰る前、中津川の市役所の食堂でご飯を食べたのを覚えている。

また

１９８２（昭和５７）年、その根の上で、ハング・グライダーの大会があったとき、わたしは初めて、その大会というのに参加した。緊張しながらテイクオフ台で風の向きを確認し待機していたとき。

そんなときに、浜松市にある航空自衛隊のブルーインパルスのブルーインパルス墜落事故がラジオのニュースで流れた。

「ブルーインパルスが落ちたダガヤ」「シンマちゃんのところでニャーか～」誰かが言った。私の緊張はピークになった。それでも私は飛んだ，左側の尾根伝いになめていったが、サーマルは噛めなかった。スッ飛びに終わった。

ブルーインパルスは素晴らしい演技で、私達を魅了してくれる。だが、そのパイロットたちは常に危険と隣り合わせなのだ。

ハング・グライダーもそうだ、危険と隣り合わせなのだ。

人は、その一部を見て、その何かを判断する。カッコイだの。感動したとか。それはそれでイイ。しかし、その陰では、その裏では、多くの努力がある。それは、その努力は、常に危険と隣り合わせなのだ。

「苦しいのは、生きている証し」河口湖１００㎞のコース上にあった言葉だ。

次の日私は、愛知県の碧南に行き、ケンさんの葬儀に参列した。

ケンさんの棺は、ケンさんの父親の要望でハング・グライダーの仲間が霊柩車まで運んだ。出棺のとき霊柩車の最後の別れのクラクションがケンさんの実家、碧南の空に鳴り響いた。ケンさんは、ハング・グライダーの仲間に見送られ、黄泉の国へと旅立った。空は青くどこまでも続く晴天の日の出来事だった。

ハング・グライダーの仲間の誰かが言った。

「ケンさんの最後にふさわしい快晴の空、ダガヤ～」

第一話

あとがき

映画「最高の人生の見つけ方」その主人公は癌になり、そこの出合った人と、棺桶リスト、死ぬまでにしたい事をやる旅に出ます。

私は６０歳、還暦になり、仕事を退職し、過去を振り返りました。自分の今まで。運よく、この世に存在し、そして自分なりの人生を生きてきました。振り返って、還暦になって思うことは、今生きていることを幸せに思うことです。

横吹での隣のマーニーの死は、まだ５０歳代だったと思います。今では働き盛りです。働いて働いて、家族のために、子どもたちのために一生懸命だった時代だった思います。

それが、寿司屋の謙さん、の時は夢を追いかけていました。大空への夢、ハング・グライダーその事故で、その人は命を落としました。チョットしたことで。そのことは誰に訪れるかわ分かりません。自分に、そのチョットしたことがあるかも知れません。

色々なことがあったけど、私は６０歳還暦まで生きてたどりつくことが出来ました。そしてパソコンの前に今、座っています。自分の人生を振り返り、過去・現在・明るい未来を夢見ています。

私には知り合いに、癌の人が３人います。その一人が、ある人を恨んでいると言っていました。恨みとは、相手に対する期待の裏返し、ということもあると言います。小さい事では教室の中のイジメ問題、昨日まで仲がよかった友達が無視してくる現実な出来事。大きい事では国と国との争い。一般の人は何もできない。やろうとはしない。その人は人を恨んだことのない人を信じられないと言いました。

私は人を恨まないと答えました。人を恨んでも、自分が寂しい思いをするだけでなにも良いことがないと。

どのような出来事も、それを肯定的に捉え、その出来事を昇華していく。昇華とは例えば、上司にこっぴどく叱られた、悔しい思いを嫌がらせで返すのではなく、その上司に一目置かせる存在になろう、と発奮材料にするのも昇華です。「命のアサガオ永遠に」その著者、丹後まみこさんの話も新潟骨髄バンクでの活動を見聞きしていると昇華だと思います。

今回、第一話を書き終わりました。何回も何回も読み直しました。人にも聞きました。他の人が読んで嫌な気分にならないかと。ある人が言いました。人の心は変えられない。自分の気持ちが一番大事、だと。

そんな癌になった方の、ある一人は膵臓がんだそうです。余命宣告も、そのような話を聞いて、自分なりに考えました。もし自分が同じようになったならば、と。自分の棺桶リストを。病気で走ることが出来ない、今書いている、この自分史を完成させる。も、そのリストの一つにあげる。そして、自分がやっている6月末の「夢街道ＣＲ」そのマラニックを走った人に、「私が亡くなっても、この道を走ってほしいと」伝えたい。

当時、謙さんは４０歳前後だったと思います。謙さんの生きたかった時代を、私は生きています。そして自分なりの夢を追いかけています。

もし自分が死ぬのなら。昇華していきたい。昇華とは。日本では火葬がほとんどです。・

この自分史「ほくえんの風」はまだまだ続きます。良かったら続きも見て下さい。

しんしん

地球から
核兵器を
なくそう!